

## 倉頭甫明先生のご退任によせて

大 田 孝 太 郎\*

倉頭先生と親しくお付き合いさせていただいたのは、私が広経大に勤めるようになってからであるから、すでに四半世紀になる。先生は広経大の草創期からおられるので、私が赴任したところ（昭和61年）にはすでに20年近く勤めておられ、当時、大学の紀要に「ニクソンの平和外交」についての長い論文をお書きになっていて、ベトナム戦争後のアメリカ外交の現実路線が複雑な糸を解きほぐそうとしている方、というのが先生にたいする私の第一印象であったように思う。先生とは年齢が少し離れていることもあったし、何よりも私の専攻している学問の対極にあると言っていい政治学という極めて現実的で実証的な学問にたいする私のコンプレックスのなせるわざであったかも知れないが、先生は私にとってははじめのうちは近寄りがたい存在であったことはたしかである。

しかし、何かのきっかけでお話してみると実に気さくで、どんな人とも分け隔てなく付き合いられるお人柄に甘えて、たちまち同年齢の友人のような感覚でみずからの無礼もかえりみずお付き合いをさせていただくようになった。爾来25年あまり、先生から政治についてだけでなく、先生ご自身の生き方からもいろいろ学ばせていただいたような気がする。

先生は根っからの政治好きで、すでに小学生のときから政治講演会に足をはこんでおられたそうである。かくも早い時期から政治的なものに興味をお持ちになっていたのはどうしてなのか、それを先生に直接お聞きしたわけではない

が、私の推測するところでは、政治にたいする先生の尽きることのない関心の奥底に、おそらく、現実の人間にたいする先生のおふれんばかりの愛着があるのではなかろうか。

確かに先生のお書かれたご論文は、冷戦時代のアメリカの外交政策やアメリカに亡命してそのまま帰化したドイツの政治学者モーゲンソーの研究などが中心で、およそ人間愛などというものを超えて展開されるパワー・ポリティクスをめぐる分析が主となっている。かかるパワー・ポリティクスの分析を通じていかに平和を確立するかということが先生の究極のテーマであったように思われる。

もちろん先生の政治学研究には、先生にとっては忘れることのできない原爆体験が色濃く投影されていることは言を俟たない。

亡くなられた辻岡先生もそうであったが、倉頭先生もご自身の原爆体験については多くを語られない。「筆舌に尽くしがたい」という言葉があるように、特に人間は極限状態に身を置いた体験をすると、体験したこととそれを表現することの間に埋めがたい何かがあることを痛切に感じざるをえないのかもしれない。たとえ言葉では十全に伝えられなくとも、とにかく伝えられるだけのものを伝えようという立場もありうるし、それはそれとして充分敬意にあたいするが、逆に、みずからの体験を言葉という船に乗せるには重すぎて沈黙せざるをえない、という立場もありうるだろう。

先生のお立場は後者であろうが、政治学者としての先生は、それと同時に言葉のもつ政治的意味をもよくよく考えられておられるのであ

\* 広島経済大学経済学部教授

う。いずれにせよ原爆体験は先生にとって私などの想像を絶するものであったことはたしかである。それが先生の政治学研究の原点となっていることは言うまでもないであろう。

国際社会で展開されるあれほど非情な政治現場の舞台裏を長いあいだ研究してこられて、人間の老獪さや狡猾さを常に空気のように吸っておられる倉頭先生であってみれば、日常生活においても少しは政治的に振る舞われて、もう少しうまく立ち回れたら、と思うことがあるが、これは私のような下司っぽい人間の考える世迷言なのであろうか。

誰もが認めるように、先生は普段は温厚な紳士として、相手に失礼があってはならぬと常に身なりを整えられ、偽善的なところは少しもなく、どんな人にたいしてもユーモアを忘れることがない。私的な交わりにおいて先生はおよそ政治的な人間とはほど遠い。

会議などの公の場でも、先生は、私心をはなれて自らの信じることを率直に表明された。KY（空気が読めない）などという干からびた言葉がたちまちひろがってしまうような、いまだ恥の文化圏から一歩も出ることのない日本社会において、倉頭先生のような方は、はなはだ生きにくいのではなからうか。

このように近くで倉頭先生を拜見していると、先生は政治学者らしく、私的な立場と公的な立場を厳しく区別されていたのではないかと思う。私的な付き合いでは、先生はどのような人に対してもあくまで思いやり深く親切であるのに対して、公の場では、個人的な感情を離れて全体として何が正しいか、正しくないかという観点を貫こうとされたのではないかと思う。

日常生活世界の論理と倫理は、政治的な世界のそれとは根本的に違う、というのは政治学のもっとも基本的な認識であろう。かのウェーバーのいう「心情倫理」と「責任倫理」の区別の含意するところもそこにあるのだろう。しか

し日常生活世界と政治の世界が次元が違うといっても、もちろん両者は何の関係もないという意味ではない。政治の論理と倫理は特定の利害のためのものではなく、あくまでわれわれの日常世界のためのものでなければならぬことは言うまでもない。

こうして、日常生活における倉頭先生のヒューマンなお人柄と公の場や学問研究における事柄にそくした毅然たる態度は、決して別々のものではなく、両者は先生の中で矛盾することなく調和しているのだと思う。

学問研究に関しては、先生は、ベトナム戦争後のアメリカ外交をこれから本格的に分析しようとされていた40歳代の後半に不幸にも大病を経験された。先生にとっては本当に無念であったにちがいない。その後も大小合わせて幾度も手術をされたにもかかわらず、そのたびごとに不死鳥のように回復された。そこには、肉体的な回復力だけではなく、先生の精神的な強さも大いに預かって力あったに間違いはない。

先生をみていると、みずからの運命に泰然と身をまかせるストア派の哲学者を彷彿とさせる。何度も死を前にした人間だけが持ちうる明るい諦念と人間にたいするかぎりない愛着——ここに倉頭先生の学問と教育の原点があるように思う。

こうしてみると先ほど先生に対して、日常生活でも少しは老獪に振る舞われたらどうか、という私の言は妄言であった。先生にとって、日常生活と次元のちがう政治の世界も究極においては身近な人に対する愛着と信頼なしには成り立たないことは自明のことなのだろう。「正直は最良のポリシーだ」というよく知られた言葉はまさに先生の生き方にあてはまるのかもしれない。いろいろなわざとらしい手段を使って政治的に振る舞っても、結局は非政治的と思われている率直さ、正直さがもっとも政治に必要なということ、最近の日本の政治状況が雄弁に

語っているように思われる。

プラトンが、現実の政治からできるだけ遠ざかってひたすら身近な人たちと徳について私的な対話を交わしたソクラテスのことを、「真の政治家」と呼んだように、倉頭先生の場合も、パワー・ポリティクスの舞台である国際政治の分析は、究極的には人々の日常生活の安寧に資するものでなければならないものあって、両者が結びつくところに「真の政治」があると考えられておられるのではなからうか。

そういう意味において倉頭先生は、ご自身の生き方と学問を決して切り離しては考えておられないように思うのである。

先生は講義にも情熱をそそがれていて、受講者が400人を越す講義でも、毎回ごとの学生のコ

メントや質問を丁寧に読まれて、次回にできるだけ誠実に答えるよう努力されておられた。学生が少しでも政治的なものの見方を身につけて、将来自立した市民として政治に対する見識をもってもらいたいという切なる願いが、先生をしてそうさせるのであろう。多数の受講生のゆえに、先生の意図は必ずしも学生には伝わっていないようなのが残念であるが、先生の学生に対する情熱は変わることなく、現在もいろいろなメディアから可能な限り情報を集められて、学生とともに現代政治の行方を見守り続けておられる。

これからもご健康には十二分に留意されて、倉頭先生らしく生きられんことを願ってやまない。